

房総半島におけるイノシシ (*Sus scrofa* Linnaeus, 1758) の生息状況

浅田正彦¹⁾・直井洋司²⁾・阿部晴恵³⁾・韭沢雄希⁴⁾

¹⁾ 千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

²⁾ 〒299-1732 千葉県富津市宇藤原 77

³⁾ (財)日本自然保護協会

〒102-0075 東京都千代田区三番町 5-24

⁴⁾ 〒142-0063 東京都品川区荏原 1-19-14-305

要 旨 千葉県房総半島において、イノシシの分布域などの生息状況と農作物被害の状況を聞き取り調査によって明らかにした。県内の在来イノシシ個体群は1970年代中頃に一度絶滅し、1980年代中頃に鴨川市東部から君津市南部にわたる地域内に、複数個体のイノシシ（あるいはイノブタ）の幼獣が移入されたと考えられた。分布域は1990年代に急速に拡大し、現在、10市町、約430 km²の地域となっていることがわかった。

キーワード: イノシシ, イノブタ, 移入, 分布, 千葉県.

現在、千葉県の房総丘陵に生息しているイノシシ (*Sus scrofa* Linnaeus, 1758) は、縄文時代（小宮, 1985）や江戸時代（松下, 1978）などにおいても、県内に生息していたことが知られている。ところが、1970年代に捕獲や個体の目撃がされていない期間があることや、他県よりイノシシあるいはイノブタ（以下、イノシシに含める）を人為的に移入したとの情報もあり、その生息状況や由来に関して不明な点が多い。また、現在、県内各地でイノシシの新たな生息情報が報告されており、分布域が拡大している可能性が高い。一方、イノシシによるイネやタケノコなどの農林作物被害が近年、急増しており、これに対応するために有害駆除による捕獲が実施されている。なお、イノブタとは、ブタ (*Sus scrofa domestica*) とイノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) の亜種間交雑個体をさす。

イノシシは他の大型哺乳類と比較して、r 選択種であることが知られており（三浦, 1991）、個体数増加率はきわめて高い（神崎, 1993）。このため、新たな分布が認められた初期の段階に、強い個体数コントロールを行っていき、「農作物被害を効果的に軽減させていく（千葉県イノシシ・キョン管理対策基本方針 千葉県環境部長 平成12年1月28日付け通知）」必要がある。そこで、千葉県におけるイノシシの保護管理のための基礎資料とすることを目的に、1) 聞き取り調査によって分布域などの生息状況と農作物被害の状況を明らかにし、2) 過去の資料（松下, 1978）やこれまで行われてきた調査（千葉, 1964; 哺乳類調査科研グループ, 1979; 千葉県, 1978; 千葉県環境部自然保護課, 1992）、および本調査結果をもとに房総半島のイノシシ生息状況の変遷を明らかにする。

調 査 方 法

調査は2000年5月13日から7月20日にかけて、千葉県（1978）や最近の捕獲記録などからイノシシの分布が予想される木更津市、市原市、袖ヶ浦市、長南町、大多喜町、大原町、夷隅町、御宿町、勝浦市、天津小湊町、鴨川市、富山町、君津市、富津市、鋸南町の15市町内において、農家に対する直接面接による聞き取りで実施した（図1）。調査地域は分布域を確定するために、連続した未分布地域が表れるまで適宜拡大させていった。聞き取り項目はイノシシの生息情報の他、被害に関する情報や移入の経緯に関する情報などである（表1）。

結 果

有効回答者数は695件であった。イノシシの生息情

表 1. 聞き取り調査項目.

1	対象者住所
2	対象者氏名
3	イノシシは出現するか
4	一番最近出現したのはいつか
5	何頭出現するか
6	ウリボウはいたか
7	一年のうちいつ頃出現するか
8	何年前から出現するようになったか
9	被害品目
10	去年からの被害量の増減
11	イノシシ・イノブタ移入の情報
12	出現、移動の方向

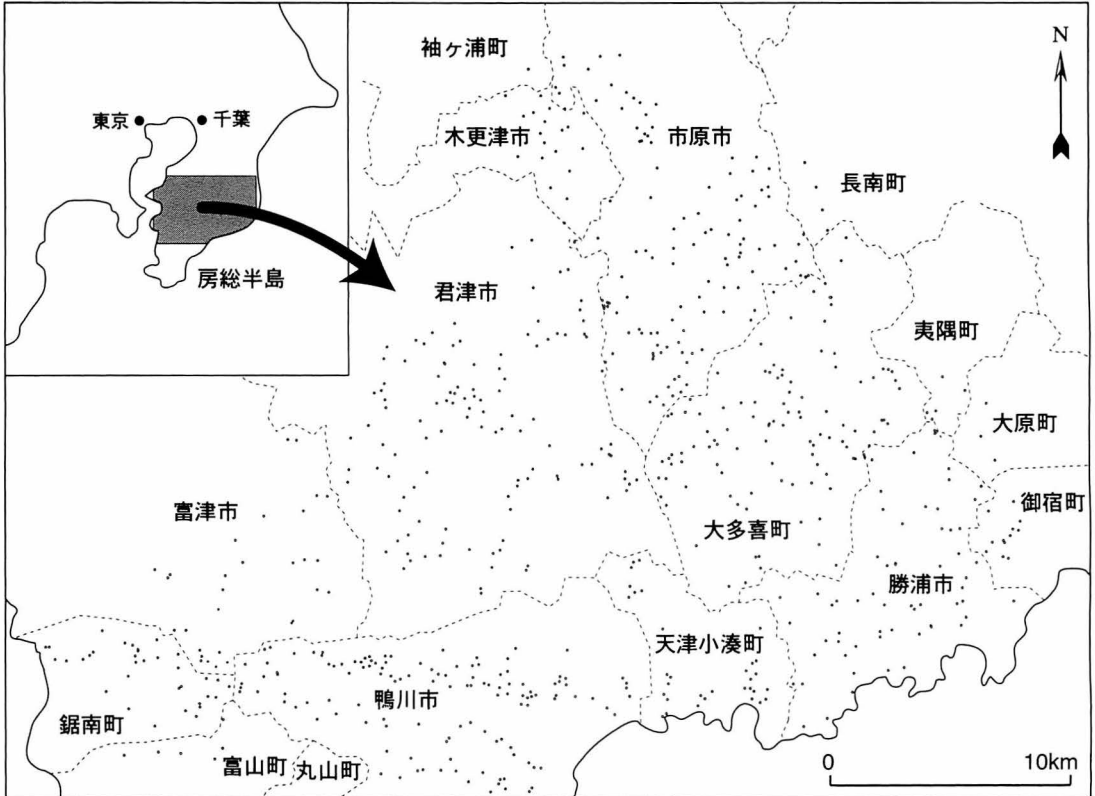


図1. 千葉県房総半島におけるイノシシの生息状況調査地。聞き取り調査を行った地点を点で示す。

報は木更津市、市原市、大多喜町、夷隅町、勝浦市、天津小湊町、鴨川市、君津市、富津市、鋸南町の10市町から274件得られた(図2)。生息情報の得られた地域の外縁を囲み、2000年7月時点での分布域を推定すると、約430km²となった。

イノシシの移入に関する情報は20件集まり、内9件は狩猟者によって放逐されたとの情報であった。また放逐地点(放逐年)は鴨川市東部から君津市南部にかけての地域で移入が行われたとの情報が4件(1985～1988年と数年前、他は年不明)、「鴨川」との回答が2件(うち1件が1995～1996年)、天津小湊町の清澄澄のものが2件、勝浦市の大森(1985年)および大沢(1993年)が各1件、市原市馬立が1件得られた。

放逐した個体の入手先については「北海道」、「長野」、「東北」が群馬、「茨城方面」との回答が得られた。また、移入されたものが「イノブタ」であるとの回答も、4件得られた。

イノシシの出現が初めてみられた年については、天津小湊町において「昭和55年」(1980年)という回答が最も古い情報だった。出現が初めてみられた時期の地域的違いをみると(図3a～d)、新しい年代ほどより

広い範囲で情報が得られた。1980年～1990年頃からイノシシの出現が開始したとの回答は、放逐地点としてあげられた鴨川市東部から君津市南部にかけての地域が多かった。

イノシシによる被害情報は229件得られ、生息情報の得られたほとんどの場所(83.6%)で被害が発生していた。被害の程度を前年(1999年度)と比較して聞いたところ、回答が得られた135件の内、54.1%の73件で増加、28.1%の38件が減少、17.7%の24件が同等と回答された(表2)。この回答の割合に地域的な違いはあまり見られなかったが、天津小湊町のみで、被害が減少したとの回答(8件)が増加したとの回答(5件)を上回っていた。複数回答で得られたイノシシによる被害品目は、回答の多いものから順に、食害としてタケノコが142件(62.0%)、サツマイモやサトイモなどのイモ類が74件(32.3%)、イネが62件(27.1%)であった。また田畑の掘り起こしや崖の崩しについて13件(5.6%)の情報が集まった。掘り起こす害の回答が得られた7件のうち6件が冬に発生していた。このほか、フキ、ヤマユリ、カボチャ、ヤツガシラ、マメ、コンニャク、落花生、ショウガの食害の回答が得られた。

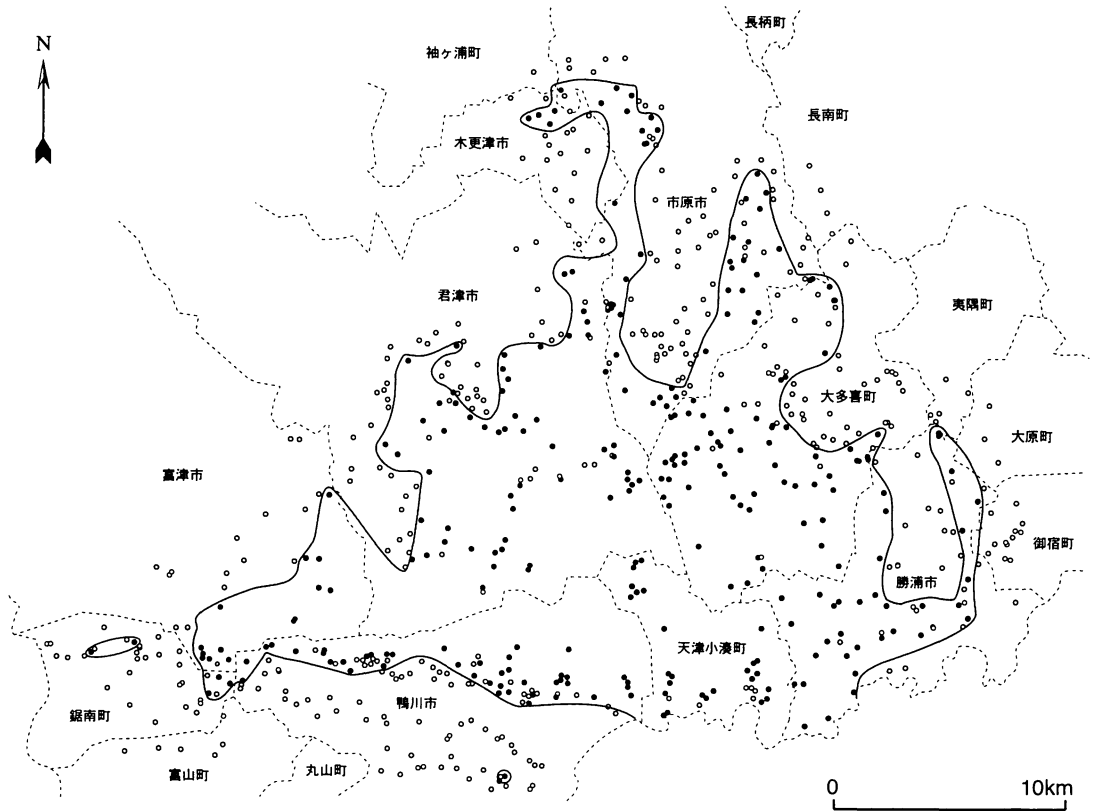


図2. 房総半島におけるイノシシの生息地点。2000年5月～7月に実施した聞き取り調査の結果を示す。ここ数年、一度でも明らかなイノシシ（イノブタを含む）による被害が発生したり、個体が目撃された場合、「生息情報がえられた地点」として、●で示した。○は情報がえられなかった地点を示す。実線は生息情報から推定した分布域の外縁を示す。

表2. イノシシの農作物被害の増減。1999年に対しての2000年の被害状況。

市 町 名	得られた回答件数			
	増加	減少	同じ	計
天津小湊町	5	8	3	16
鴨 川 市	12	5	2	19
勝 浦 市	11	4	4	19
大多喜町	31	16	6	53
君 津 市	6	1	7	14
富 津 市	1	1	1	3
市 原 市	7	3	1	11
計	73	38	24	135

生息が確認された年代別に被害発生率をみてみると(図4)、生息が確認されてから3年以上経過した地点(1980～1997年)では89～97%の発生率だったが、2年経過した地点で82%、1年経過した地点で70%だった。2000年の値が低かったのは、作物の収穫期以前の7月に調査を行ったためであろう。このことから、

生息が確認されて2年未満の地域では、被害の発生率がやや低いものの、3年以上経過すると、5年以上生息が経過した地域と同程度に被害が発生することがわかった。

考 察

過去に行われたイノシシの分布に関する調査と今回の調査結果を踏まえ、千葉県における分布および生息状況の変遷をまとめてみる。

1. 1970年代中頃までの状況

江戸時代～戦前にかけてのイノシシの生息状況は、分布調査がなされていないため明らかではないが、将軍の鹿狩り(松下, 1978)に関する史料から、北総地域にも広く分布していたことが推測される。千葉徳爾(1964)は1960年時点での全国のイノシシの分布を明らかにし、県内には房総丘陵周辺に「僅かに」生息しているとしていた。1976年には郵送アンケートが実施され、全国的なイノシシの分布と被害状況が調査された(哺乳類分布調査科研グループ, 1979)。しかし、

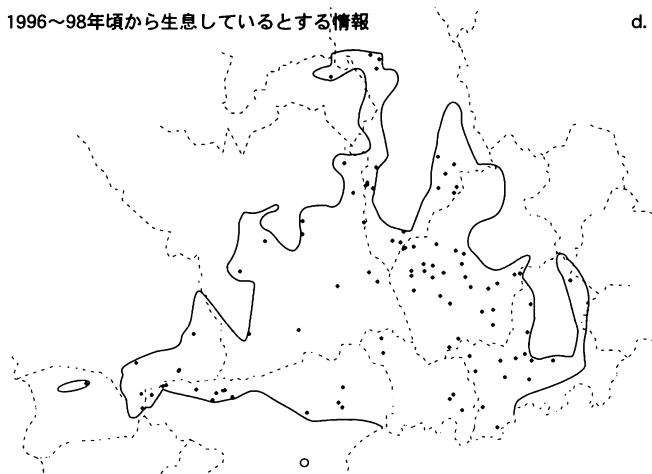
a. 1980～1990年頃から生息しているとする情報



b. 1993～95年頃から生息しているとする情報



c. 1996～98年頃から生息しているとする情報



d. 1999・2000年頃から生息しているとする情報

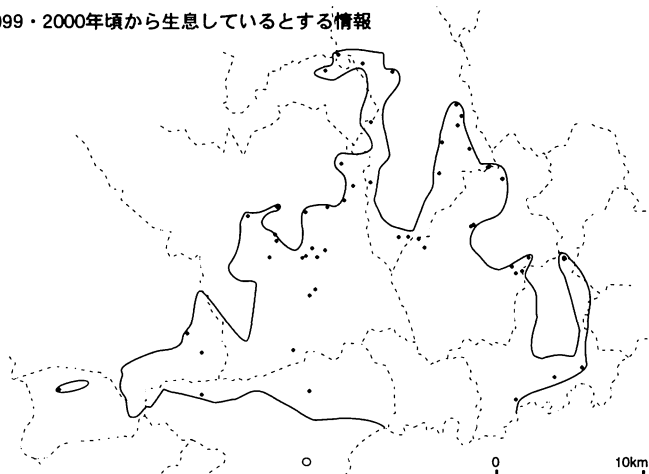


図3. 房総半島におけるイノシシの出現開始時期。調査は2000年5月～7月に実施した。生息情報がえられた地点をイノシシの出現が始まった時期によって分けて示した。実線で囲った地域は2000年7月時点での推定分布域を示す。

県内の生息および被害情報は得られず、すべて、生息していたものが「いなくなった」との回答のため、「千葉県ではイノシシは絶滅している」と結論づけられた。1978年には第2回自然環境保全基礎調査が行わ

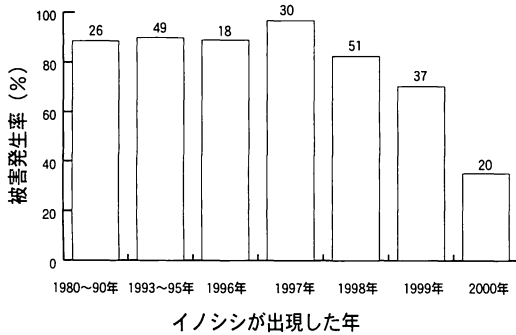


図4. イノシシが出現した年別の農作物被害発生率 (%)。イノシシの生息情報件数に占める被害発生件数の割合を、出現がはじまった年によって分けて示した。グラフ上部の数字は件数を示す。

れ(千葉県, 1978), 1970~78年の間の目撃情報が収拾され, 北総の我孫子市布佐および沼南町岩井と房総丘陵周辺から生息情報が得られていた。戦後の捕獲頭数の変化をみると(図5), 1946~49年の間に337頭捕獲されていたものが, 徐々に減少し, 1950年代中頃から1960年代は年間数頭で推移していた。1972年に2頭捕獲された後は13年間捕獲記録がなかった。

このように, 1970年代中頃の状況について, 1972年以降の捕獲記録はなく, 1976年の調査(哺乳類分布調査科研グループ, 1979)で生息および被害情報がなかった。1978年の調査(千葉県, 1978)では, 聞き取り方法が1970年からの目撃記録であるので, 捕獲記録のある1972年以前の記録である可能性がある。また, イノシシは農林作物に顕著な被害を発生させ, また地面の掘り返しなど目立った痕跡を残すことから, 生息が周辺住民に認知されやすい。さらに, 今回の調査のイノシシの分布年代に関する設問では, 「1980年頃」との回答が最も古い記録で, それよりも昔からの生息情報は得ることができなかった。以上の

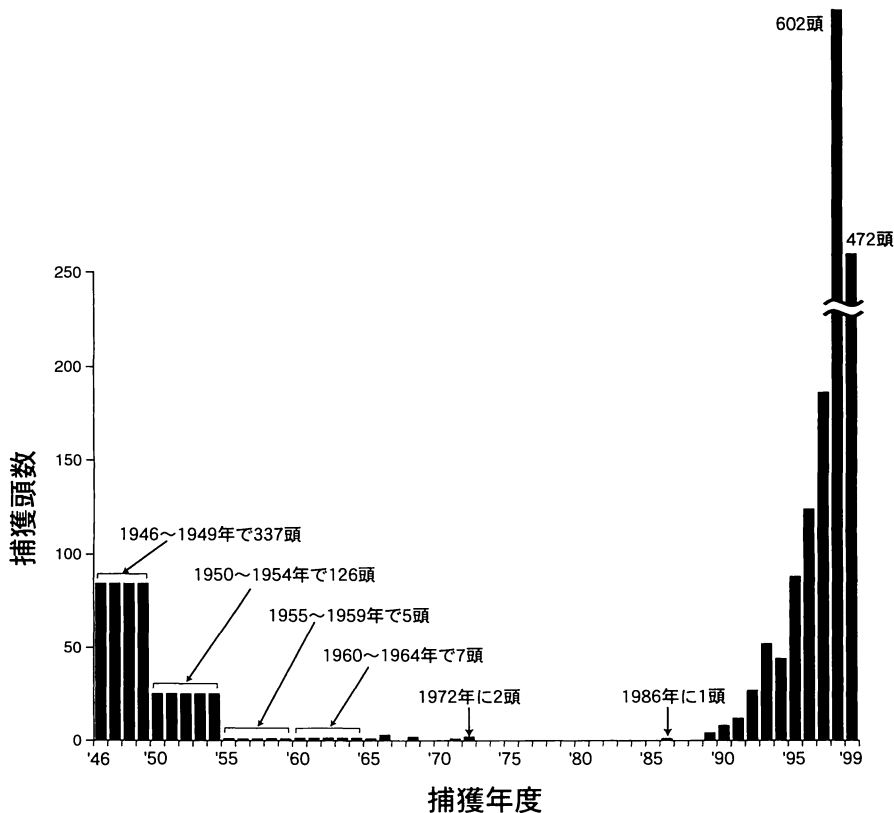


図5. 千葉県におけるイノシシ(イノブタを含む)の年度別の捕獲頭数。有害獣駆除および狩猟の合計を示す。1964年度以前の値は集計された複数年の捕獲頭数を年数で割った値を示した。

ことから、哺乳類分布調査科研グループ(1979)によって判断されたように、県内の在来イノシシ個体群は1970年代中頃に絶滅したと考えるのが妥当である。

この時期にイノシシ個体群が絶滅した要因として、ひとつは戦中から戦後の食糧難の時期の乱獲が考えられる。ふたつめはブタとの共通感染症である豚コレラの蔓延が考えられる。国内の発生は1888年(明治21年)といわれており、千葉県においては1952年から1968年の間に発生し、養豚経営をやめる農家が続出した(千葉県農林部畜産課, 1980)。この豚コレラの発生時期と捕獲個体数の減少時期(図5)が重なっており、乱獲により減少した個体数が豚コレラの罹患により減少し、絶滅した可能性がある。

2. 1980年代初頭からの状況

13年間捕獲記録がない期間の後、1986年に君津市においてイノシシがふたたび捕獲された(図5)。この時期以降、狩猟および有害駆除による捕獲数は年々増加し、1999年度には年間600頭を越えた。1989年には千葉県環境部自然保護課によって狩猟者などに対する聞き取り調査により哺乳類各種の分布調査が行われ(千葉県環境部自然保護課, 1992)、房総丘陵で11メッシュ(国土標準1kmメッシュ単位)分の生息情報が得られていた。

今回の調査で得られた移入に関する情報や、その地点の周辺で比較的古い生息情報が得られたことなどから判断して、1980年代中頃に鴨川市東部から君津市南部にわたる地域内に、複数個体のイノシシの幼獣が移入(放逐)されたと考えられた。また、このほかにも数カ所で複数回、移入された可能性も考えられる。

移入個体について、イノブタであるとの情報や、在来イノシシが生息しておらず、イノブタ飼育者のいる北海道(高橋, 1995)からの移入情報もあることから、実際にイノブタが移入された可能性が高い。以上の経緯から、現在房総半島に生息しているイノシシ個体群は移入個体群(国内移入)である可能性がきわめて高いと考えられた。

3. 現在の分布状況

出現が初めてみられた時期の地域的違い(図3a～d)から、分布は1990年代に急速に拡大したことが示唆され、現在は10市町、約430km²の地域に分布していることがわかった。ここ数年で、新しく分布した地域(市原市、袖ヶ浦市など)では、有害駆除や狩猟による個体数コントロールは十分になされていない。分布拡大している地域の前線部の周辺には、新たな侵入を阻む物理的障害(市街地や大きな河川や湖など)は少ないため、個体数コントロールが十分に行われなければ、イノシシの分布地域は拡大していくこと

が予想され、今後も調査を継続してモニタリングしていく必要がある。

今回の結果から、イノシシの農作物被害の特性として、加害作物がイネの他はタケノコやイモ類、こんにゃく、落花生などの地下部にできる作物に集中している点が上げられる。全国的なイノシシの被害状況の調査(日本野生生物研究センター, 1991)によると、被害作物は全国的にはイネとイモ類が多く、次いでタケノコなどが多かった。しかし、房総ではタケノコが最も多く、イネは比較的少なかった。この違いは、房総ではイノシシの分布域がシカやサル分布域と重複している地域が多く、多くの田圃がすでに防護柵で囲われているのに対し、竹林における防除は比較的行われていないことと関係しているのかもしれない。タケノコ、イネは主要作物であるので、本種の出現はこの地域の農業に深刻なダメージを与えることになる。今後、分布域が拡大すると、これらの被害量も増大すると予想され、イノシシ管理のためには上述の個体数コントロールの他、イノシシ用の防除柵の新規設置と既設のシカ・サル防除柵の改良が必要と思われる。

謝 辞

この調査の一部は、房総のシカ調査会が千葉県より受託した「平成12年度千葉県イノシシ・キョン管理対策調査事業」の一環として実施したものである。調査に際し、正岡佐智恵(千葉黎明高校)、池田文隆(勝浦市立北中学校)の各氏にご協力いただいた。東京農工大学の神崎伸夫博士ならびに小寺祐二氏には、調査方法のご教示や文献のご紹介をいただいた。また、千葉県立中央博物館の落合啓二博士には、本調査の事務業務を分担していただいた上、草稿を査読していただいた。ここに厚く御礼申しあげる。

引用文献

- 千葉県. 1978. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(哺乳類). 27 pp. 千葉県, 千葉.
- 千葉県環境部自然保護課. 1992. 獣類生息分布図作成調査報告書. 79 pp. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- 千葉県農林部畜産課, 1980. 千葉県家畜防疫史. 151 pp. 千葉県農林部畜産課, 千葉.
- 千葉徳爾. 1964. 日本列島における猪・鹿の棲息状態とその変動. 地理学評論 37: 575-592.
- 哺乳類分布調査科研グループ. 1979. カモシカ・シカ・ヒグマ・ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシの全国的生息分布ならびに被害分布. 生物科学 31: 96-112.
- 神崎伸夫. 1993. ニホンイノシシ(*Sus scrofa leucomystax*)の個体群動態, 狩猟, 流通に関する研究. 158 pp. 東京農工大学博士論文.
- 小宮 孟. 1985. 遺跡出土の動物遺骸にもとづく動物分布と生業の復原. 千葉県文化財センター研究紀要 9: 75-178.
- 松下邦夫. 1978. 小金牧と将軍鹿狩り. In 小金牧と御鹿狩, pp. 7-11. 松戸市文化ホール, 松戸.
- 三浦慎悟. 1991. 日本産偶蹄類の生活史戦略とその保護

管理. In 朝日稔・川道武男 (編), 現代の哺乳類学, pp. 244-273. 朝倉書店, 東京.
日本野生生物研究センター, 1991. 平成 2 年度鳥獣害性
対策調査「獣類 (イノシシ) 調査」報告書. 108 pp. 日
本野生生物研究センター, 東京.
高橋春成, 1995. 野生動物と野生化家畜. 309 pp. 大明
堂, 東京.

(2001 年 3 月 10 日受理)

**Distribution of Wild Boar
(*Sus scrofa* Linnaeus, 1758)
in Boso Peninsula,
Central Japan**

Masahiko Asada¹⁾, Yoji Naoi²⁾, Harue Abe³⁾
and Yuki Nirasawa⁴⁾

¹⁾ Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuou-ku, Chiba 260-8682, Japan

²⁾ 77 Utobara, Futtusi, Chiba 299-1732, Japan

³⁾ The Nature Conservation Society of Japan
5-24 Sanbancho, Chiyoda-ku,
Tokyo 102-0075, Japan

⁴⁾ 1-19-14-305 Ebara, Shinagawa-ku,
Tokyo 142-0063, Japan

Current distribution of wild boar in the Boso Peninsula was examined by a questionnaire survey on local residents. It was considered that a native population in this area has been extinct in the middle of 1970's. In the middle of 1980's, individuals from populations of wild boar, domestic swine or hybrids between these two were introduced around eastern Kamogawa City and western Kimitsu City. These population was distributed in a total of 10 cities and towns and encompassed nearly 430 km².